

🌸 プログラム 🌸

第Ⅰ部

小泉 知子
フェスティバル・マーチ

兼田 敏
吹奏楽のためのパッサカリア

ピーター・グレイアム
ハリソンの夢

～休憩～

第Ⅱ部

アレクサンドル・ポルフィーリエヴィチ・ボロディン
交響曲第2番 口短調

歌劇『イーゴリ公』より「だったん人の踊り」

🌸 目次 🌸

プロフィール(客演指揮者・トレーナー・司会)	2
プログラムノート	5
特集 東西交流から見える呼称問題	9
化学者ボロディンの功績	11
オーケストラ用の曲⇒吹奏楽 どうやって“変換”するの？	13
協会徒然草	14
演奏会スタッフ	17
楽友協会年譜	18
出演メンバー	20

🌸 プログラムノート 🌸

フェスティバル・マーチ / 小泉 知子

作曲者の長谷川知子さん(旧姓小泉さん)は私の高校の同級生で、同じ吹奏楽部でホルンを吹いていました。普段はおとなしめの人でしたが、話し始めると感性の鋭い人だと感じました。

3年生の時の体育祭で、男子がラジオ体操のような体操の演技をしたのですが、それは体育の先生たちが考案した新しいものでした。掛け声をかけながら練習をしていたのですが、伴奏の音楽がまだなくて楽しいとは言えませんでした。するとある時、小泉さんから、「体育の先生から頼まれて、体操のための音楽を作曲しているのだが、途中で一ヶ所、8呼間※×2ではなく、9呼間×2の部分があり、それをどう作曲したらよいか困っている」と相談を受けました。私は8呼間の後に強引な1呼間の低音フォルティッシモ強打を提案しましたが、彼女は3呼間×3×2に割り直して、非常に音楽的に曲を完成させました。そういう考えもあるのだなと感心させられました。自分の友達が作曲したピアノ曲で体操の演技をしたのは、今でも懐かしい思い出です。

高校卒業後、彼女は国立音楽大学で音楽を学びながら、横浜楽友協会でも創立時から演奏を続

けていました。大学では卒業論文を書くことが多いですが、彼女の学科では論文ではなく、作曲が課せられていたそうです。彼女は岩井直溥氏の吹奏楽曲が好きで、自分も彼のような雰囲気曲を作りたいとかねてから思っていました。作曲法を花村光浩氏、木管楽器の使い方などを藤田玄播氏に教わりながら、「フェスティバル・マーチ」を完成させました。この曲は、大学でも作品の優秀さが認められ、卒業作品の代表として、大阪泰久氏の指揮で国立音楽大学の吹奏楽団によって初演されました。これは横浜楽友協会にとっても非常に誇らしいことで、さっそく次の定期演奏会で演奏しました。今回、久しぶりに取り上げることになり、当時のことなども思い出されて、とても懐かしい気分になります。作曲者による改訂が加えられて、原曲より少し編成を増やして演奏します。

とても親しみやすく、さわやかで明るい雰囲気曲です。皆さんにも気に入って頂けると幸いです。どうぞ、お楽しみください。(村田 真)

※呼間:体操でよく用いられる言葉で、拍・カウントのこと

吹奏楽のためのパッサカリア / 兼田 敏

日本の吹奏楽界に多大な貢献をした作曲家である兼田敏(1935~2002)が、音楽之友社の創立30周年を記念して委嘱されて1971年に作曲した。彼の代表作の一つである。

そのスコア(総譜)には「中学校や高等学校のバンドで可能な演奏技術で、音楽の楽しみや喜びが味わえるようなものを書きたいと思いました。」と書

かれており、その意図の通り吹奏楽コンクールをはじめとして広く演奏されている。

パッサカリアとは、スペイン語の *pasear* (歩く)と *calle* (通り)に由来する音楽形式で、低音で演奏される緩やかな3拍子の主題をもとにした変奏曲を意味している。

この曲の冒頭でユーフォニアムとテューバによつ



図1 パッサカリアの主題

て提示される10小節の主題(図1参照)は、調子記号もなく12半音階のすべての音から構成されている。この主題について作曲者は、12の音からできているのは偶然であって十二音技法[※]で作ったわけではなく、長調とか短調といった調性ではないが、Eb音を中心とした調性を持っていると述べている。

主題に続いて、4拍子の決然としたアレグロやカ

プリチオーソ、ワルツなど、テンポや雰囲気、拍子を変えながら18の変奏が続き、最後の変奏では全員で主題を演奏し壮大に終結する。(編集部)

※十二音技法:シェーンベルクが体系化したとされる作曲技法で、12半音階のすべての音を均等に使用することによって、調性の束縛を離れようとする技法。

ハリソンの夢 / P.グレイアム

1. 「ハリソン」とは？

ジョン・ハリソン(John Harrison:英、1693~1776)は18世紀に活躍した時計職人であり、英国では広く知られた人物である。

いわゆる庶民階級の出身で十分な教育も受けていなかったが、振動や温度変化に弱く船上での利用に向かない振り子時計の代わりに、洋上でも正確な時間の計測が可能な「クロノメーター」を開発し、それ以降の大陸間航海における「海の安全」に多大な貢献があった人物である。そもそもなぜ正確な時計が海の安全と関係あるのか、解説が必要だろう。

一言で言うと、安全な航海のために最も重要なことは自船の位置を正確に把握することであるが、比較的把握が容易い緯度(地軸の傾きは一定であるため、日の出・日没等の計測により把握が可能)に対して、1時間に15°ごとの自転により刻々と変化する経度は、出港時の時刻を基準に、船上での時刻を正確に把握することがもっとも簡易な計測方法だったからである。実際、当時多くの船が自らの位置を失って座礁・沈没し、1707年にはイギリス南西部のシリー諸島で軍艦4隻が座礁して搭乗者2000名が死亡するなど、おびただしい数の人命が喪われてきた。これらの事故に心を痛めたハリソンは、人生の殆どをより優れた時計装置の開発に尽力することになる。その完成こそがハリソンの「夢」であり、様々な妨害工作や身分差別的な扱いにもめげずに、最終的に1日の誤差がわずか0.3秒という装置を完成させた。莫大な懸賞金も含め、その完成者としての榮譽に浴したの死のわずか3年前、ハリソンが80歳の時であった。(実際には

それよりはるか以前に懸賞基準を満たした時計は完成していたのだが、ハリソン自身がその出来に満足せず、改良に改良を重ねた結果ここまで時間がかかったようだ。)



図2 ハリソンが完成させたクロノメーター[※]

2. Grade7の衝撃!(笑)

作曲者のP.グレイアム(Peter Graham:英、1958~)は他に「地底旅行」「レッドマシーン」などの作品で知られる英国の作曲家である。本作は上記のエピソードをもとに、2000年にまず金管バンド向けに書きおろされ、ほどなく吹奏楽作品としても完成した。

ところで、本作が発表された際、まず注目を集めたのはその難易グレードであった。従来吹奏楽曲の難易度は1(易)~6(難)の6つのグレードに分類されていたところ、本作はいきなりそれを超越したGrade7として発表され、当時「古今最高難易度の吹奏楽曲」としてランク付けられることとなった。今にして思えば、難易度(グレード)は作曲者がある程度恣意的に定めることができるものであって、これまで存在しない7をつけること自体、作曲者が

自ら広げた大風呂敷だったと言えないことはないが、さすがに本作、かなりの難曲であることは誰も否定し得ないだろう。冒頭から荒々しく、かつ目まぐるしく展開される三十二分音符の洪水や、ひっきりなしに挿入される数々の変拍子(7/8、6/16、11/16、7/16、5/2 など)や頭拍を欠いた3連符や5連符、四拍子で奏されるワルツ(笑)など、まず拍を憶えるだけで気が狂いそうになるようなパッセージが「これでもか」と言わんばかりに連発される。ただし、これらの難しさは、意外に「慣れ」でどうにかなる類のものが多く、前半さえ乗り切れば、後半はなんとか勢いでカワしきれぬ曲でもあるため、トータルで考えるとそれほど極端な難曲とは言えないのではないかと思う。むしろこの曲、練習をやり始めた時期はキツイが慣れるにつれてなんとなく快感を覚えるタイプの、いわば“麻薬的な”魅力をもつ曲であり、実際の難易度でいえば「まだまだ上の曲はある」と思って間違いない。

また、こういうと技巧的な面ばかり強調されて中身が無い曲のようにも聞こえるかもしれないが、勿論そんなことはまったくなく、逆に技巧と有機的に結びつき計算しつくされた構成美といい、全体を貫く魅力的なメロディといい、今世紀を代表する吹奏楽の名曲といって差し支えなからう。

交響曲第2番 ロ短調 / A.P.ボロディン

ボロディンは、1833年、当時の都レニングラードに皇族系の非嫡出子として生まれました。ピアノも含めて優れた教育を受ける機会に恵まれ、レニングラード大学医学部を最優秀で卒業します。その後は化学の世界で数々の功績を上げます。彼が発見した反応に「ボロディン反応」と彼の名が残ったことから、その功績の大きさがうかがえます。

軍の病院に勤務している際、24歳でムソルグスキーと出会いシューマンの曲を紹介され、本格的に音楽に興味を持ちます。彼自身自らのことを「日曜作曲家」と称していましたが、1863年に「あの」バラキレフに出会ってから本格的に作曲の勉強をはじめました。バラキレフは作曲家でもあり、音楽

3. 楽曲について

最後になったが、簡単に曲の紹介を。

冒頭でパーカッションの激しい連打に続いて開始される目まぐるしい音の洪水は、ハリソンが奮闘する作業部屋の混沌と時の刻みを表すとも、荒れ狂う波に翻弄される船を表すとも言われるが、時折挿入されるファゴットの物悲しいソロや、トロンボーンの荒々しいソリ、ファゴットやアルトサクソフォンのソロによるグロテスクなワルツなどすべてに、極めて数学的に計算しつくされた趣がある。続く中間部はゆったりとしたエレジーで、海難事故による死者たちへの鎮魂歌がホルンソロにより叙情的に奏される。その後8回にわたって鳴り響く鎮魂の鐘とともに打ち鳴らされるハンドベルの音に引きずられる形で曲は元の喧騒へと押し流されてゆく。やがてその喧騒は段々と時計の動きとともに高揚に向かう輝きに満ちたものとなり、最後は「ハリソンの夢」の成就とともに再び奏されるエレジーと、分散和音による壮大なクライマックスを迎え、長大なクレッシェンドとともに感動的に幕を閉じる。(演奏時間約14分)
(菅沼 裕)

※©Racklever 2006 Harrison's Chronometer H5
<http://creativecommons.org/licenses/by/2.5/>

の教科書にも出てくる「五人組」と呼ばれるロシア国民楽派の作曲家集団のプロデューサーです。彼の影響を受けてボロディンは最後に「五人組」に参加し、数は少ないものの珠玉の作品を生み出しています。

バラキレフは「作曲家として一人前になるなら交響曲を書くべきだ」と五人組に対して強く薦めていました。その中で最も優れた交響曲作品を残しているのがボロディンです。ボロディンは結局2つの交響曲を完成させましたが、第2番は彼の傑作の一つとされています。本日演奏する歌劇『イーゴリ公』と同時期に作曲され、完成するまでに何と18年もかかっています。1877年2月14日の初演は

成功とはいえませんでした。その後修正を加え、リムスキー・コルサコフが指揮した再演では好評価を得ています。

この交響曲第2番は全曲を流れる力強いロシア的要素の故に、「勇者」と言う別名もあります。ワインガルトナー（昔のウィーンフィルの常任指揮者）は、「ロシア人の国民性を知ろうと思えば、チャイコフスキーの悲愴交響曲とボロディンの交響曲第2番を聴くだけで十分だ」と言ってこの曲を高く評価し、さらに「ロシアを未だ見たことのない人たちにも、ロシア人の生活の完全な描写を提供するチャイコフスキー等の悲観的なロシア音楽とは反対に、この作品は溢れ出る気迫、生活への愛情と自然の力を表している。それは、ロシアの自然への讃歌でありロシアの大地を照らす太陽への讃歌だ」と言ったそうです。最高の賛辞ですね。

さて一楽章。まさに勇者の名にふさわしいオープニング主題です。弦楽器で演奏する場合、ダウン奏法ですべての音符を弓を引き下げる方向で弾きます。縦の楽器の場合は右に弾く（引く）感じ。弦楽器は細かい音符を弓を上下（左右）に擦る反復運動で音符を続けて演奏しますが、普通「下げる（ダウン）」方向に腕の力を入れ易いので、アクセントや拍子の頭がちょうどその方向に向くように弓の反復運動を調整します。この行為をボウイングと言い、弦楽器セクションのボウイングを全員で合わせることはコンサートマスターの重要な役目の一つです。一楽章のオープニングは連続する音符をすべてダウン方向に「引き直す」ことですべての音符に力を込めるように演奏するのです。これをどうやって管楽器で表現するか、見どころの一つです。私なら首でもタテに振りたいところですが、ラッパなので実際に演奏することが出来ないのが残念です！

二楽章の見どころ、と言うか難しいところはその

歌劇『イーゴリ公』より「だったん人の踊り」／ A.P.ボロディン

「だったん人の踊り」として親しまれているこの曲は、歌劇『イーゴリ公』のなかでは「ポロヴェツ人の踊りと合唱」という原題となっており、第2幕で、イーゴリ公がポロヴェツ人たちに捕われた先で、踊りと合唱を見せてもらう、という場面の楽曲です。（日

拍子です。拍子には三拍子、四拍子、はたまた変則的な五拍子など色々ありますが、この楽章、なんと一拍子(1/1)で表記されているのです。実際の音楽は四拍子(または二拍子)なのですが、譜面をちゃんと理解するまでには少し時間がかかりました。

三楽章。ボロディンの真骨頂。クラリネットとハーブにより演奏される牧歌的などこか懐かしいメロディが極寒の気候にも凍えない、温かいロシアの人々の心、自然の力を感じさせます。メロディは美しく、次から次へと場面転換が続き、とてもドラマティックな音楽なのですがその表現はとても難しいです。ただ美しいだけでなく後のシヨスタコーヴィチにも繋がる冷徹さ、所謂ロシアっぽさが所々に見えています。盛り上がった後、クラリネットのソロが初めよりもどこか黄昏れて演奏されて、そのまま切れ目なく第四楽章に繋がっていきます。

四楽章はいよいよクライマックスということでパークッション群が活躍します。中でもタンバリンが印象的です。チャイコフスキーのイタリア奇想曲もタンバリンをととても効果的に使っている曲だと勝手に思っていますが、それに勝るとも劣らない魅力的なタンバリンです。テクニク的にもかなり見ものです。楽章全体を支配する独特のシンコペーションのリズムは正にロシア、コサックダンスを踊りたくくなります。踊りの音楽らしく一気に畳み掛けるようにジャン！！と終わるところもこの曲の特徴ではないでしょうか。

「ボロディンと言えはだったん人」ですが、実はこんな良い曲もあるのです。気に入って頂ければ幸いです！

文責：業火のトランペット吹き

参考文献：「ロシア国民楽派」音楽之友社

なつたと言われています)のなかのノヴゴロド・セヴェルスキー公国の君主でした*。イーゴリ公は、キエフ・ルーシを襲撃し略奪を行うポロヴェツ人を討伐するため1185年に出撃するものの、逆に捕われてしまいます。しかしながら、ポロヴェツ人の首長のコンチャークは、イーゴリ公の心意気に打たれ、そこで「ポロヴェツ人の踊りと合唱」を見せることとなります。その後、イーゴリ公はポロヴェツ人から脱出を図り、自分の不在の間に荒れてしまった祖国を治めに帰還する、というのがこの歌劇のあらすじになります。

このあらすじを読むと、このイーゴリ公というのは戦に負けたダメな君主のように見えます。しかしながら、このイーゴリ公の遠征を軍記物語(日本で言えば『平家物語』のようなもの)としてまとめた作品『イーゴリ軍記』は、12世紀末に成立した作者不詳の物語ですが、そこには、「外敵に対して総ての力を結集させて祖国を守り抜こう」というメッセージが通底しており、それがボロディンがこの歌劇を作曲しようとした時代(=ロシアが近代国家として成立しようとした時代)の国民主義と共鳴し合ったと言えます。

歌劇『イーゴリ公』は、ボロディンの死後、リムスキー・コルサコフとグラズノフの補筆を得て、完成します。1890年に初演されましたが、この初演からさかのぼった100年の間に、ロシアとトルコの間では1877～78年の露土戦争をはじめ、5回の戦争がありました。当時のロシアの側からすれば、『イーゴリ軍記』の舞台となった地域はロシアのものであり、イーゴリ公は異民族ポロヴェツ人の侵入を阻んだ歴史上の英雄という扱いになります。歌劇『イーゴリ公』全体から感じられるロシアを讃える国民主義にはそのような影響があると言えるのではないのでしょうか。そして、国民主義の盛り上がった時期の

ロシアで完成したこの歌劇は大成功を博したと言われています。

このようなロシアの国民主義の影響は「だったん人の踊り」にも様々に見られます。特に特徴的なのは合唱の歌詞です。特に、広く知られている旋律と共に歌われる歌詞は、奴隷として捕われてしまった人々が歌う「風の翼に乗って飛んでゆけ」という祖国ロシアを思う歌として有名です。一方で、力強く男声が歌う箇所では、ポロヴェツ人が自分たちの主コンチャークを讃える歌詞も登場します。本日の演奏でも、原曲が合唱付きであることを踏まえまして、合唱のパートも各楽器に振り分けた編曲を行っております。管弦楽と合唱の総合芸術としての魅力は、吹奏楽で表現しても変わらない、そのような演奏がお届けできればと思っております。(相澤真一)

※:キエフ・ルーシとは、キエフを首都とした東欧の国家で、日本ではキエフ大公国と呼ばれることも多いです。ノヴゴロド・セヴェルスキー公国は、今のロシアにある都市ノヴゴロドの周辺ではなく、キエフ・ルーシ南部(現ウクライナの首都キエフの北東で、ロシアの国境近く)にある「ノーウホロド=シーヴェルシクィイ」を周辺とする地域を指すと言われています。

参考文献

ゾーリナ著・佐藤靖彦訳『ボロディン——その生涯と作品』(新読者社)。

黒川祐次「ダッタン人はどんな踊りを踊ったか——遊牧民たちの戦いの歴史に思いを馳せて」『N 響ライブラリー カレイドスコープ』

<http://www.nhks.or.jp/library/kaleidoscope/3778/>

《特集》

東西交流から見える呼称問題

相澤 真一

日本でユーラシア大陸の東西交流と言えば、おそらく「シルクロード」(絹の道)を頭に思い浮かべる人が多いと思います。しかし、ユーラシア大陸の文化交流のルートは3本あったことが明らかになっています。絹

の道、海の道、そして草原の道です。東西交流のルートは時に軍勢を動かすルートにもなり、草原の道を通じて、トルコ系、モンゴル系、スラブ系、とユーラシア大陸の覇権は移り変わってきました。草原の道は、シルクロードよりも政治上、経済上、大きな役割を果たしていたと指摘する研究もあるほどです。そしてこの草原の道が、実際には全く異なるにもかかわらず、日本人が混同してしまったポロヴェツ人(トルコ系)とだったん人(モンゴル系)を地理的にも歴史的にもつないでいるのです。

地理の授業で、「ステップ気候」という気候の種類を習ったことを覚えている方もいらっしゃると思います。ステップ気候とは、乾燥気候に属しながらも、少量の雨が年間を通じて時々降るため、砂漠ではなく、草原が形成される気候のことです。ユーラシア大陸の中央部には、モンゴル高原から現在のカザフスタンを横断し、黒海の北側、現在のウクライナに至る草原が存在します。この東西にのびる草原を通過しているのが「草原の道」というわけです。

乾燥していて耕作に適さない気候によって発達した生活形態が遊牧です。遊牧の生活は、土地に縛られる農耕と違い、家畜と共に自由に移動でき、土地を治める国家や君主を必ずしも必要としません。しかし、文明が発達すると、実際には生活必需品(穀物や刃物など)を交易する必要があり、徐々に遊牧帝国が形成されていきます。

歌劇『イーゴリ公』の舞台となる12世紀頃、この地域を制圧していたのはトルコ系の遊牧民でした。そして、歌劇『イーゴリ公』に登場する「ポロヴェツ人」とは、当時のルーシ(現在のロシア)側が現在のウクライナあたりにいるトルコ系の人々のことを指していた呼称なのです。

一方、だったん人は漢字では「韃靼人」と表記しますが、これは、モンゴル系のタタール人を意味します。タタール人は、モンゴル系の人々のなかではあくまで一民族ではありますが、モンゴル帝国形成時には帝国を構成する一部族となり、またしばしばこの「タタール」あるいは「韃靼」という表記はモンゴル一般を指すこともあります。イーゴリ公の活躍から約50年後の13世紀半ば、モンゴル帝国は、イーゴリ公が治めたノヴゴロド・セヴェルスキー公国を含むスラブ系のキエフ・ルーシを侵略します。ルーシ側はポロヴェツ人と連合して抵抗を試みるものの、結果として、モンゴル支配に屈指することになります。これをロシアでは「タタールの軛くわ」と称するのだそうです。

さて、では、トルコ系の「ポロヴェツ人の踊り」をモンゴル系の「だったん人の踊り」と日本人が理解してしま



図3 12世紀のルーシ・ポロヴェツ・モンゴル

ったのはなぜなのでしょう？これには諸説ありますが、総合すると「中国よりは向こうのほうだけどヨーロッパではない人たち」くらいのイメージで捉えて、ポロヴェツ人のことを「だったん人」と訳したのではないかという感じがしてまいります。または、あと200年ずれていけば、イーゴリ公の舞台となった地域は「ポロヴェツ人」ではなく、「だったん人」が生活していたエリアだったので、時代背景を取り違えたのかもしれない。

人間というのは、近くにあるものは細かい違いに気づくので細かく分類したくなり、遠くにあるものはよくわからないので大雑把にしか括らないものです。そういう認識の仕方に、なぜ日本人がこの曲を当初「だったん人」の踊りと呼んだのか、という点が隠されているように思われます。

本日は、まさに東西交流の最前線にあった草原地域に思いを馳せながら、そして、現在も紛争の続くこの地域の平和を祈りながら、ボロディンの作品をお楽しみくだされば幸いです。

参考文献

岡田英弘「『歴史の主舞台 草原の道』岡田英弘著作集Ⅱ 世界史とは何か』所収、2013年。

黒川祐次「ダッタン人はどんな踊りを踊ったか——遊牧民たちの戦いの歴史に思いを馳せて」『N響ライブラリー カレイドスコープ』 <http://www.nhkso.or.jp/library/kaleidoscope/3778/>。

宮崎正勝『世界全史』日本実業出版社、2015年。

化学者ボロディンの功績

森野 りす

ボロディンは日曜作曲家と自称しており、本職は医学・化学であった。このことについて日本語WEBページの多くは、「化学者としては、ボロディン反応に名を残している。また、アルドール反応を発見したとされる。」といった感じで紹介している。学生時代に有機化学専攻だった私はこれを読んで、ボロディン反応の方は素通りして「え！あの！あの有名なアルドール反応を発見した人だったのか！」と気持ちが沸き立った。そして、アルドール反応の発見がどんなにすごいことなのかを紹介させてほしいと non troppo 編集部に直訴し、このスペースを頂けることになった。

アルドール反応とは、炭素-炭素結合生成反応の1つであり・・・

と、勢い込んで書き出してはみたものの、既に化学の世界を離れてしばらく経つ私が反応の詳細な解説をしようにも教科書の受け売りしかできないし、喜んでいただける方も少ないような気がする。そこで、どうして気持ちが沸き立ったのかの理由として、アルドール反応の意義をご紹介したい。

プラスチック、合成繊維、薬、香料、、私達の身の回りで幅広く役立っている有機化合物は、その基本骨格が炭素で作られている。目的の有機化合物を合成するには、まず炭素同士をつないで骨組みを作り、そこに酸素や窒素などを含む部品を追加していくことになる。しかし「炭素同士をつなぐ」の一言で表現するのが憚られるほど、実際には意図した炭素同士を反応させて目的の化合物を合成するのは難しい。炭素の骨組みを作るのは、プラモデルを組み立てるようなわけにはいかないのだ。

今から約130年前、有機化学の黎明期と言える頃にボロディンは特定の炭素同士(図4の炭素Aと炭素B)が結合しやすい反応条件を発見し、その結果、有機化合物の効率的な合成に寄与したのである。その反応こそがアルドール反応であり、発見されて以来、より高確率で意図した場所に結合を作る、よりローコス

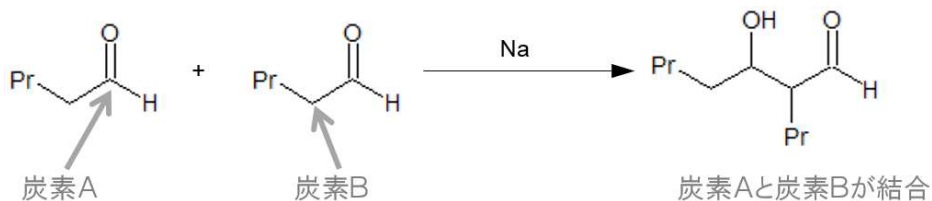


図4 ボロディンが実際にアルドール反応を発見した際の反応

トでの合成を可能にする、など幾多の改良研究を経て、今も現役で炭素-炭素結合の生成に用いられている。あなたが飲んでる薬や、彼女がつけている香水も、アルドール反応を使って合成されたのかもしれない。そんな有用な反応を発見した人と、「だったん人の踊り」を作曲した人が同一人物だったなんて！と私が興奮した理由を、少しおわかりいただけたらどうか。

ちなみに、ボロディン反応の方は「そんな反応、習ったっけ・・・？」という印象だったので、学生時代の教科書を引っ張り出し、索引を見てみた*1。アルドール反応の解説には、応用的な内容も含めて10ページが割かれていたが、ボロディン反応は索引には載っていなかった。Google先生に検索ヒット件数をお伺いしてみても、

ボロディン反応： 約 13,800 件 Borodin reaction: 約 76,500 件

アルドール反応： 約 61,400 件 Aldol reaction: 約 376,000 件

と、アルドール反応に言及しているサイトの方が多かった。私が思い出せなかったのも勉強不足だけが原因ではなさそうだし、訳をしつつ、ボロディン反応も、目的の化合物を合成するための部品を作る反応として、発見当時は重要な位置づけだっただろうという勝手な推測を述べてフォローしておきたい。

しかし、有用で知名度が高い反応であるにも関わらず、なぜアルドール反応発見の功績はあっさりとは紹介されていないのだろうか。また、アルドール反応を発見した“とされる”という表記も、ちょっと遠慮がちである。この違和感のもとは何なのかを探ってみたところ、アルドール反応発見当時、誰が最初の発見者なのかをめぐった争いが起きていたことがわかった*2。インターネットなど当然なく、他の研究者が同じ研究をしていないかどうかを把握するのは困難を極めた当時、こうした論争は珍しくなかったのだろうが、ボロディンの場合相手が悪かった。ベンゼン環、俗にいう「亀の甲」の六角形の構造を提唱した偉大なドイツの化学者、ケクレが相手だったのである*3。ケクレとの論争の末、ボロディンはアルドール反応の発見者であると主張しないことを選択したという*4。現在はボロディンの発見の方が早かったという見解もあるが、こうしたいざこざがあったことから「アルドール反応を発見した」とは言い切らずに「とされる」を追加したくなる書き手の気持ちもわからなくはない。

最後は少し奥歯に物が挟まったような話題だったとお感じになったかもしれないが、私にとっては「名曲を後世に残した上に、アルドール反応を発見して、しかもあのケクレと争うほどの化学者だったなんて、ボロディンてほんとにすごい！」と、感心ポイントが1つ増える結果となった。本職での功績の偉大さを真似るのは難しそうだが、日曜音楽家である点では我々も同じ。せめてボロディンに微笑んでもらえる演奏をしたいものである。

参考文献

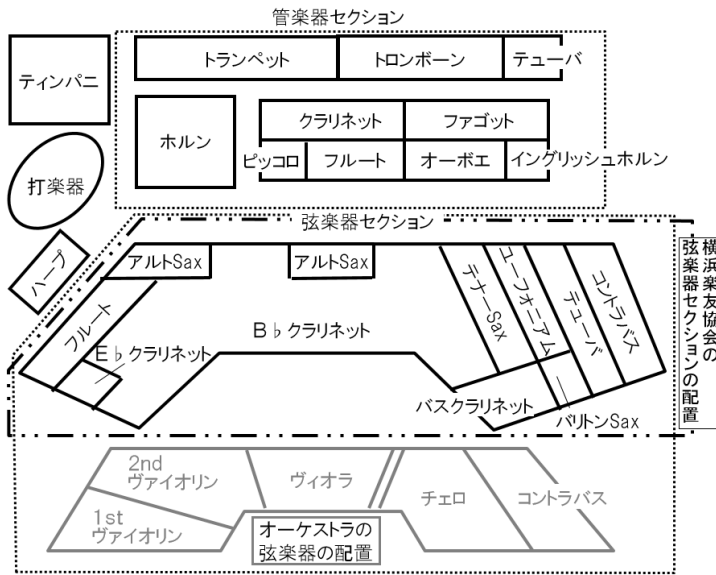
*1 モリソン ボイド 有機化学 第5版(東京化学同人)

*2 The Research in Organic Chemistry of Aleksandr Borodhin *Ambix* 1989, 36, 121-137

*3 参考文献2と4ではケクレと争ったとされているが、フランスの化学者ヴルツと同年に発見したという説もある。

*4 “Try and Fall Sick …”—The Composer, Chemist, and Surgeon Aleksandr Borodin *Angew. Chem. Int. Ed.* 2010, 49, 6490-6495

オーケストラ用の曲⇒吹奏楽 どうやって“変換”するの？



横浜楽友協会では、ジャンルにこだわらず様々な音楽に挑戦しています。そして、そのほとんどは「原調演奏」、つまり、作曲家の書いたままの調で演奏しています。たとえば交響曲ならば、オーケストラで演奏されるものと同じ調で演奏するのです。

オーケストラの曲を吹奏楽用にアレンジした市販の楽譜は、ほとんどが管楽器で演奏しやすいように元の調から移調されています。原調で演奏したいからといって、オーケストラ用の譜面をそのまま吹奏楽の編成で使おうとすると、困ったことになります。オーケストラの管楽器パート(私達はこのパートを「ソロ管」と呼んでいます)は、作曲者が書いたままで良いとしても、弦楽器の部分が問題になるのです。

管楽器と弦楽器とでは、それぞれの楽器の調はもちろん、音域、音の大きさ、音色も全く違

います。その違いを把握した上で、どの管楽器をどの弦楽器に当てはめるのか、決めなければなりません。

そこで登場するのが編曲を担当する、アレンジャーです。(もちろんプロではありません。他の会員と同じアマチュア音楽家です。)アレンジャーは、市販されているミニチュアスコア(すべての楽器の楽譜=総譜がコンパクトにまとめられているオーケストラ楽譜の「文庫版」みたいなもの)から譜面を起し、弦楽器のパートをすべて管楽器に振り分けて、アレンジし直します。

つまり、楽友協会には、その楽譜を元に「弦パート」を「吹いている」人がたくさんいるわけです。指揮者から「ヴィオラ、音が大きい。」なんて指示を受けるのはクラリネットだったりサクソだったりします。

この楽譜がないと演奏会の練習が始められません。我々が練習もなくのんびりしている頃、アレンジャーは必死に楽譜を書いてくれています。昔はアレンジャーが手書きした楽譜を切り貼りしたりもしましたが、最近はパソコンのおかげで、一人一人にきれいな楽譜が渡ります。パソコンへの入力も(出力も)、もちろんアレンジャーがやっています。ありがたいことです。足を向けては寝られません。

★私たちと一緒に演奏しませんか？

興味を持たれた方は下記までご連絡下さい。

連絡先→事務局…080(2120)3210

(平日20～21時、土日祝日9～21時)

E-mail…ypskouhou@hotmail.com

横浜楽友協会ウェブサイト

<http://yps.at.webry.info/>

横浜楽友協会 Facebook ページ

<https://www.facebook.com/ypswo>



❀ 協会徒然草 ❀

変わらないもの

ピッコロドルチェ

仕事から帰って夕食を作り、片付けもそこそこに楽器を吹く。わずか30分足らずだけど、この演奏会の出演を決めてから毎日のスケジュールに加わった時間。それは甘い小さなお菓子のようにながらなくなるし、時々娘に横取りされる。

楽友協会に入会したのは2年前。当時だって学校にサークルにバイトに忙しかっていたが、まあ、今の比ではない。今は亡き池松先生のご指導のもと、最初の定演は『ローマの松』。隣で吹いていた芸大生の楽器が260万円と聞いて、恐る恐る音を出していたっけ(音にも楽器にもぶつかったら大変)。プロムナードコンサートで吹いた『アルル』。優しいサクソやオーボエの大先輩に支えて頂きながら、ヒヤヒヤしつつ、でもとっってもとっっても楽しかったステージ、今でも鮮明に思い出せる。

16年前に母となり、それからは一日24時間の殆どが仕事、家事、育児に消えていく。子供は可愛いし、仕事はやりがいがあるし、家事も下手なりに嫌いではない。でも、やらなくてはならないことが多すぎて吹けないもどかしさ、いや、楽器を吹くことすら考えなくなった。たまに吹くのは子供のリクエストで『アンパンマンのマーチ』や『ドラえもん』。即興で適当に吹いても大喜び。楽器が吹けて良かったと母子共に思える瞬間。それでもどうしても吹きたくなって、二度目の妊婦の時は大きなお腹を抱えて参加してしまった。お腹にしながら県民ホールでの『ショスタコ5番』に出演してしまった娘の性格はご想像にお任せしたい。

「ぜひ一緒に」「待ってます」と毎年賀状に書いて下さる方や子育てしつつ毎年ステージで輝いている友人、私の想いを大切にしてくれる友人に励まされ、ついに出演を決めてしまった。さて、久しぶりの協会は随分変化があった。アプリでの出欠管理、楽譜のデータ配信、(昔は電話と切り貼りだった)、そしてメンバーも。私の方は体力、初見力の低下、指の回らなさ。でも、忙しい中での段取り術は随分自信がついたし、子供達も自分で料理をして、空腹を満たせるようになった(これは決して教え

たわけではなく、必要に迫られて身に付いた賜物)。それから、楽器のメンテナンスに行ったり、譜面をさらったり、音楽に接する時間を捻出するようになったこと。

一方、変わらないのは協会のメンバーが皆、無類の音楽好きであること。我がパートリーダーは毎週はるばる大宮から通ってくる。仕事でもないのに休日返上で様々な事情をクリアしながら集まってくるのはとても大変なのだけど、楽器を演奏している顔はとても輝いている。私も、合奏の時間が好きだし、吹けなかった時期を思うと今吹けるのは嬉しくてたまらない。

今日の本番が終わると、暫く練習はお休み。次は出られるかな？ 子供や仕事の都合と重ならないといいな。きっと楽器ともメンバーとも細く長く付き合い合っていくのだろうな。私の中での音楽はこれからも変わらないんだと思う。

最後に、この想いを支えて下さった皆様、忙しいのに会場に駆けつけて下さった皆様、そして忙しさゆえに変わりばえのしない食事に付き合ってくれている家族に心から感謝します。

ボロディンとベルリンフィル・ジルヴェスターと セロ吹きのゴーシュ

今回の選曲でボロディンの交響曲第2番とだったん人の踊りに決まった時に、どこかでこの組み合わせで、演奏会の映像を見たことがある、と思い出した。調べてみると、2007年の年末にベルリンフィルのジルヴェスターコンサートで、この組み合わせの演奏を行っていた。この年はオープニングがだったん人の踊り、中プロがボロディンの交響曲第2番で、ちょうど今回の演奏とは逆順で演奏されていた。ちなみにメインプロは展覧会の絵で、ロシア音楽特集の年だった。

巷では、ウィーンフィルハーモニー管弦楽団のニューイヤーコンサートのほうが有名であるが、毎年、どんな曲をやるのだろう、という楽しみでは、ベルリンフィルのジルヴェスターのほうが面白い。このベルリンフィルのジルヴェスターを初めてテレビで

見たのは2004年の年末だった。12月31日締切という締切原稿を書き終えて、1時過ぎにテレビを付けたらジルヴェスターをやっていた(毎年、ベルリン時間で17時30分、日本時間1時30分が開演である)。その年に取り上げていたのは、オルフのカルミナ・ブラーナ。衛星生中継でダイナミックな演奏に触れて、原稿を書き上げた高揚感も相俟って、ものすごく感動してしまった。それ以来、「いつかはジルヴェスターを聴きに行きたい」と思って、毎年、録画をしていた。上記の交響曲第2番だったん人の踊りの組み合わせも、そういう思いで見っていたから映像として記憶に残っていたのだろう。しかしながら、当時はまともに食えない苦しい大学院生生活。ジルヴェスターなんて夢のまた夢だった。

それから、紆余曲折を経て、とりあえず食いはぐれないくらいに生活ができるようになった昨年秋に、何を思い余ったか、ベルリンフィルのジルヴェスターのチケットを1枚買ってしまった。ちょうど冬物のスーツがどれも着古してしまっていたので、ぎりぎりの12月28日に1着新調し、翌日ベルリンに飛んだ。雪化粧したベルリンのフィルハーモニーホールは、いつになく華やいだ雰囲気だった。10数席先にはメルケル首相がいて、ドイツが国を挙げて世界

に文化発信する様子がかがわれた。

昨年は中欧、東欧特集でメインプログラムはゾルタン・コダーイのハーリ・ヤノシュだった。吹奏楽ファンの一部にはこの曲の4楽章でアルトサクソフォンのソロがあるのが楽しみであろうが、大変残念なことに、この楽章だけ(!)カットされていた。また、自分の座席のちょうど頭上にテレビカメラがあり、時々、ト書きをめくる音が耳障りだったのが残念だった。前日までは入れている途中休憩も、全世界に放送しているために入れなかったりと、全体として、衛星生中継を考慮しているのだなあとも感じた。ともあれ、念願のジルヴェスターを堪能させてもらったことは間違いない。

それから私の中では、それまで以上のベルリンフィルブームが続いていて、ベルリンフィルの演奏が見放題のデジタルコンサートホールの会員にもなってしまった。今回の演奏会にあたって、何度もこのボロディンのカップリングの演奏を聴いていた。もちろん、世界一の名手が集まるベルリン・フィルの演奏に、テクニックにおいて我々がかんうはずもないのだが、ベルリンフィルが毎年ジルヴェスターで新年を迎える以上に新鮮な気持ちで、本日の演奏がお届けできたらいいなと思っている。

徒然草 特別編 ～アメリカ支部だより～

サクソフォン 近藤仁史

毎年このステージで当団コンサート・マスターとして、指揮者の小田野先生、YPSの仲間の皆さん、そして何よりお集まりのお客様と同じ時間を共有させていただいておりましたが、そんな私に事件が起きました。

今年4月からアメリカの支社への赴任を命じられ、なんと向こう数年は演奏での参加ができない身の上になってしまいました。この文章はその私の心にポッカーあいた穴を覗きこむようなものであります。

渡米して最初の1か月。日本での仕事もまだ引きずりながら、組織を作る新しい仕事と就職と引越しと車の購入をいっぺんにやるような状況です。アパート探しと契約、家具や車の購入と高額の買い物物の連続で、お買い物好きの方には堪らない状況かもしれませんが、私は正直めまいがするほどです。

こちらではKDFCという24時間クラシックのFM局があります。リスナーからの寄付で成り立っている非営利のラジオ局です。iPhoneのアプリで日本でもリアルタイムで聴けるので時々聴いていたのですが、こちらでも車の中、また帰宅後はiPhoneのスピーカーですが、寂しいのでずっとかけています。最近スペイン奇想曲やラフマニノフの2番など、YPSで本番をやった曲がかかり、音楽堂での本番を思

い出しました。朝はバロックや古典が中心、昼はいろいろなバリエーション、夕方はチャイコフスキーやマーラーなどこつり系も多くかかり、夜中に近くなるとまたバロックに戻るといった感じでまわっています。昔は車の運転中に知らない良い曲がかかると、目的地に着いても駐車場に停めたまま最後まで聞いて曲名をメモするようなこともやっていましたが、今はWebでプログラムが確認できますし、iPhoneに聞かせると曲名や演奏者を返してくれるようなアプリもあり、便利な世の中になりました。5月15日にはアメリカとキューバの国交回復交渉に関連してキューバを訪問したミネソタ交響楽団の演奏会が、なんとライブ放送されました。時々放送が途切れるのもむしろ臨場感を与え、プログラムはエグモント序曲、キューバ国立合唱団と合同で合唱幻想曲、メインは英雄交響曲のオール・ベートーベン・プロ！会場は熱狂、交響曲では楽章ごとに拍手が入る興奮ぶり。ミネソタ響はキューバで初めて演奏するアメリカの交響楽団の榮譽に浴しました。こういうことを放送する局、日本にも現れないでしょうか。

演奏する方の音楽活動では、こちらの私のサクソフォンの師匠、デビッド・ヘンダーソン氏に20年ぶりに再会しました。彼は現在は惜しくも解散してしまったサンフランシスコ・サクソフォン四重奏団の創設メンバーで、20年前に私がこちらに最初の赴任をしていた時に師事していました。現在同氏はマイケル・ティルソン・トーマス率いるサンフランシスコ交響楽団のサクソフォンの1st callである他に、新しいカルテットの活動、スタンフォード大学のBraun Music Centerという音楽学校で講師をしています。現在スタンフォードの学生以外には弟子を取っていない状況と聞いたのですが、私の個人レッスン再開は「もちろん！」という感じで引き受けていただけました。5月の初めにはサンフランシスコ・バレエでプロコフィエフ/ロメオとジュリエットがかかっている、師匠がテナーで全公演乗っていました。場所は戦争記念オペラ・ハウス、サンフランシスコ講和条約が調印された場所で、サンフランシスコ響の本拠地のデイビー・シンフォニー・ホールの隣です。\$132のDress Circle席は懐にも響きましたが、ピットの見える席を買ったので、例の(サクソフォンの鬼門の)「騎士たちの踊り」のテナーソロの前のソワソワした感じも見えました。公演後にステージドアで会いましたが、3時間近くの公演を連日繰り返す中でも、ここはやっぱり緊張するそうです。現在はバレエは終わり、この次はサンフランシスコ響で「展覧会の絵」です。ゴータイエ・カプソン独奏のエルガーのチェロ協奏曲が中プロで、シェフはN響を振っていたシャルル・デュワさんです。さらにその後はミュージカル“Anything Goes”があるそうで、結構売れっ子です。

肝心の私の演奏活動はというと、幸いこちらの人々は土日は働かないので、週末は自分の時間が確保できて、アパートでサクソフォンの練習は続けられています。日本にいたころにはYPSのものすごい楽譜をさらうのに必死で取り組むことのできなかった(言い訳)エチュード数冊も持ってきています。(案の定あんまり進んでいません。)私のレッスンはアンリ・トマジの「バラード」になりました。師匠のボルドー音楽院の卒業演奏の曲だったそうで、同氏のさらに師匠のジャン＝マリー・ロンデックス氏の書き込みのたっぷり入った楽譜を今度発掘して持ってきていただけるとのことで、楽しみにしています。

YPSの本番が近付くにつれ、そしてこちらに来て改めて、YPSの活動が自分にとっていかにかけがえのないものであったかということを感じています。今のところ本番当日に合わせて帰国できる見通しが立っていないのですが、サンフランシスコ→羽田を往復する日本航空のフライトは現在、金曜夜中1:35 SF発→日曜朝4:45羽田着、日曜夜中0:05羽田発→日曜夕方5:25 SF着という、なんと一日も会社を休まずに日曜日を日本で過ごせるというとんでもないことができるスケジュールになっています。

もし本日音楽堂で色々な意味で目の赤らんだ私を見つけましたら、どうぞお気軽に声をお掛けください。

横浜楽友協会年譜



- 1975 4/1 横浜翠嵐同窓音楽愛好家協会発足
10/1 横浜楽友協会に改名 吹奏楽部門57名、弦楽部門14名
- 1976 4/27 吹奏楽団第1回定期演奏会 cond. 里見正憲、小山由美
桑原洋明/吹奏楽のための三つの断章
J.S.バッハ/管弦楽組曲第3番より アリア
C.M.ウェーバー/クラリネット協奏曲第2番第1楽章
(CI独奏:小久保雅之)
- 1988 2/14 プロムナードコンサートNo.2 cond. 矢口岳志、前沢実
A.ハチャトゥリアン/バレエ組曲「ガイヌ」より ほか
- 1977 5/8 第2回定期演奏会 cond. 池松和彦、里見正憲
G.ホルスト/吹奏楽のための組曲第2番
F.ドップラー/ハンガリアリア田園幻想曲 (FI独奏:徳植俊之)
G.ホルスト/吹奏楽のための組曲第1番
H.ベルリオーズ/幻想交響曲第4、5楽章 ほか
- 6/26 第12回定期演奏会 cond. 池松和彦、岩田晴之
K.J.アルフォード/後甲板にて
R.ヴォーン=ウィリアムズ/イギリス民謡組曲
P.A.グレインジャー/リンカーンシャーの花束
W.ウォルトン/クラウン・インベリアル
R.ワグナー/「ニュルンベルグのマイスター・ジンガー」第一幕への前奏曲
O.レスピーギ/ローマの松
- 1978 5/16 第3回定期演奏会 cond. 池松和彦、里見正憲
岩井直博/シンコペーテッド・マーチ「明日に向かって」
R.ヴォーン=ウィリアムズ(A.リード編曲)/シネ・ノミネ
A.リード/シンフォニック・プレリュード
W.ロジャース/ボランディア・ボルカ (Euph独奏:佐藤透)
R.ワグナー/「ニュルンベルグのマイスター・ジンガー」第一幕への前奏曲
C.ドビュッシー/小組曲
P.I.チャイコフスキー/荘厳序曲「1812年」ほか
- 1989 7/9 第13回定期演奏会 cond. 池松和彦、岩田晴之
G.F.ヘンデル/王宮の花火の音楽
D.ミヨー/フランス組曲
A.リード/エル・カミーノ・レアル
J.シベリウス/交響曲第2番二長調
- 1979 4/26 第4回定期演奏会 cond. 池松和彦、里見正憲
R.ヴォーン=ウィリアムズ/イギリス民謡組曲
D.ミヨー/フランス組曲
P.I.チャイコフスキー/交響曲第4番へ短調
- 1990 3/10 プロムナードコンサートNo.4 cond. 岩田晴之
A.リード/春の猟犬 ほか
- 6/30 第14回定期演奏会 cond. 池松和彦、岩田晴之
G.シェイク/ウイリアム・バード組曲より「オックスフォード伯爵のマーチ」
G.ホルスト/ムーアサイド組曲
A.リード/春の猟犬
横浜クラリネット合奏団
J.S.バッハ/トッカータとフーガ ニ短調
K.シュターミツ/クラリネット協奏曲-ダルムシュタット協奏曲より
(CI独奏:池松和彦)
- 1980 5/13 第5回定期演奏会 cond. 池松和彦、里見正憲
R.ワグナー/歌劇「ローエングリン」よりエルザの大聖堂への行列
R.ヴォーン=ウィリアムズ/行進曲風トッカータ
G.ビゼー/組曲「カルメン」
G.ガブリエリ/第1旋法によるカンツォン
J.シベリウス/フィンランディア
J.S.バッハ/パッサカリアとフーガ 八短調
P.I.チャイコフスキー/スラヴ行進曲 ほか
- 1981 5/2 第6回定期演奏会 cond. 池松和彦、里見正憲
小泉知子/フェスティバル・マーチ
R.ジェイガー/第2組曲、第3組曲
J.シベリウス/交響曲第2番二長調
- 1982 5/8 第7回定期演奏会 cond. 池松和彦、里見正憲
小泉知子/フェスティバル・マーチ
R.ミッチェル/海の歌
A.リード/アレレヤ・ラウダムス・テ
P.I.チャイコフスキー/交響曲第5番ホ短調 ほか
- 1983 5/29 第8回定期演奏会 cond. 池松和彦、里見正憲
G.ホルスト/ムーアサイド組曲
P.A.グレインジャー/岸辺のモー、ロントネリへの歌、羊飼いのへイ
A.コーブランド/戸外のための序曲
G.F.ヘンデル/王宮の花火の音楽
F.リスト/前奏曲
H.ベルリオーズ/「ローマの謝肉祭」序曲
- 1984 8/11 第9回定期演奏会 cond. 池松和彦、里見正憲
R.ニクソン/フェスティバル・ファンファーレ・マーチ
F.メンデルスゾーン/吹奏楽のための序曲
R.ベネット/吹奏楽のためのシンフォニック・ソング
P.I.チャイコフスキー/交響曲第6番ホ短調《悲愴》
- 1986 6/29 第10回定期演奏会 cond. 池松和彦、岩田晴之
J.ハンセン/行進曲「ヴァルドレス」
G.ホルスト/
吹奏楽のための組曲第2番、ハマースミ〜前奏曲とスケルツォ〜
E.エルガー/威風堂々第1番
P.I.チャイコフスキー/交響曲第4番へ短調
- 1987 2/15 プロムナードコンサート cond. 岩田晴之、前沢実
D.シヨスタコーヴィチ/祝典序曲 ほか
- 7/19 第11回定期演奏会 cond. 池松和彦、岩田晴之
- 1991 1/20 中高生のためのバンドセミナー cond. 池松和彦
R.ワグナー/「ニュルンベルグのマイスター・ジンガー」第一幕への前奏曲
- 1992 6/21 池松和彦追悼演奏会
新田伸雄/トロンボーン・カルテット:
J.G.ストール/ターナムジーク
G.ガブリエリ/4声のソナタ
G.P.テレマン/トロンボーン協奏曲第4番
クラリネット、コントラバス、ピアノ、男声朗読による四重奏
安藤久義/レクイエム
横浜クラリネット合奏団
A.ブライヤー/2本のトランペットのための協奏曲
(Tp独奏:田宮堅二、Ob独奏:池田祐子)
J.S.バッハ/トッカータとフーガ ニ短調
横浜楽友協会吹奏楽団 cond. 岩田晴之
P.I.チャイコフスキー/交響曲第5番ホ短調
- 1993 7/3 第15回定期演奏会 cond. 小田野宏之、岩田晴之
F.メンデルスゾーン/吹奏楽のための序曲
S.ランセン/秋の朝の序曲
J.C.バーンズ/秋のひとりごと (Ob独奏:徳田振作)
A.ドヴォルザーク/交響曲第9番ホ短調「新世界から」
- 1994 6/5 第16回定期演奏会 cond. A.リード、前沢実
F.スッペ/「詩人と農夫」序曲
C.M.ウェーバー/クラリネット協奏曲第1番 (CI独奏:高瀬千恵子)
A.リード/第4交響曲
C.フランク(A.リード編曲)/天使の糧
A.リード/エル・カミーノ・レアル
- 1995 7/9 第17回定期演奏会 cond. 小田野宏之
E.ハワーズ/行列のファンファーレ

		G.ガブリエリ/第7旋法によるカンツォン第2番 N.リムスキー=コルサコフ/歌劇「ムラダ」より「貴族たちの行列」 J.ヴァン=デル=ロースト/ブスタ〜4つのジブシー・ダンス P.I.チャイコフスキー/交響曲第6番短調(悲愴)			D.シヨスタコーヴィチ/交響曲第5番ニ短調
10/10		プロムナードコンサート'95 cond.川嶋耕太郎、長谷川正英 H.ジンマー/バックドラフト<メドレー> ほか	2004	2/11	中高生のための吹奏楽セミナー No.4 第26回定期演奏会 cond.小田野宏之 M.アーノルド/4つのスコットランド舞曲 保科洋/パストラール(牧歌) F.レハール(鈴木英史編曲)/「メリー・ウイドウ」セレクション J.ブラームス/交響曲第1番ハ短調
1996	6/29	第18回定期演奏会 cond.小田野宏之 P.デュカス/ラ・ペリのファンファーレ L.ガンヌ/ロレーヌ行進曲 D.ミヨー/フランス組曲 H.ベルリオーズ/幻想交響曲		11/28	プロムナードコンサート'04 cond.長谷川正英 C.M.シェーンベルク/「ミス・サイゴン」より ほか
	12/15	プロムナードコンサート'96 cond.長谷川正英 L.アンダーソン/クリスマス・フェスティバル ほか	2005	6/4	第27回定期演奏会 cond.小田野宏之 F.メンデルスゾーン/吹奏楽のための序曲 V.ネリベル/二つの交響的断章 M.de ファリャ/バレエ音楽「三角帽子」
1997	6/8	第19回定期演奏会 cond.深石宗太郎、岩田晴之ほか J.C.バーンズ/サ・ロング・グレイ・ライン A.リード/春の猟犬 P.スパーク/ドラゴンの年 W.A.モーツァルト/歌劇「魔笛」より 序曲、「おいらは鳥差し」「復讐の心は地獄のように燃え」 G.ヴェルディ/歌劇「運命の力」序曲 P.マスカーニ/歌劇「カヴァレリア・ルスティカーナ」間奏曲 G.ヴェルディ/歌劇「アイダ」より凱旋行進曲		11/19	プロムナードコンサート'05 cond.長谷川正英 J.シュトラスII世(鈴木英史編曲)/喜歌劇「こうもり」セレクション ほか
	11/3	中高生のための吹奏楽セミナー No.2	2006	7/9	第28回定期演奏会 cond.小田野宏之 E.グレンゾン/フェスティヴァ A.リード/バラード アルトサクソフォンとバンドのための J.ジル/コルドバのモスク P.I.チャイコフスキー/交響曲第5番ハ短調
	12/21	プロムナードコンサート'97 cond.中村純、梶谷正文 ほか A.リード/エル・カミーノ・レアル、ロシアのクリスマス音楽 ほか		11/23	プロムナードコンサート'06 cond.長谷川正英 A.リード/十二夜 ほか
1998	6/28	第20回定期演奏会 cond.小田野宏之 A.リード/音楽祭のプレリュード 伊藤康英/ぐるりよぎ J.ブラームス/交響曲第2番 ニ長調	2007	7/1	第29回定期演奏会 cond.小田野宏之 R.ゼイガー/ジュピターテ P.A.グレンジャー/リンカーンシャーの花東 P.I.チャイコフスキー/バレエ音楽「くるみ割り人形」ハイライト
	11/23	プロムナードコンサート'98 cond. 岩田晴之 C.サン=サーンス/歌劇「サムソンとデリラ」より「バッカナール」 ほか	2008	2/3	プロムナードコンサート'08 cond.長谷川正英 B.アッペルモン/ノアの方舟 ほか
1999	6/12	第21回定期演奏会 cond.伊藤 透 S.シャイト/カンツォン・コルネット G.ガブリエリ/ピアノとフォルテのソナタ E.エルガー/威風堂々第1番 P.A.グレンジャー/デリー地方のアイランド民謡、羊飼いの呼び声 G.ホルスト/吹奏楽のための組曲第1番 G.F.ヘンデル/シバの女王の入場 P.I.チャイコフスキー/幻想序曲「ロメオとジュリエット」 A.リード/オセロ		9/21	第30回記念定期演奏会 cond.小田野宏之 J.シュトラウスII世/喜歌劇「こうもり」序曲 G.ガーシュウィン/バリのアメリカ人 C.サン=サーンス/交響曲第3番ハ短調「オルガン付き」
	11/14	プロムナードコンサート'99 cond.杉本毅、長谷川正英 P.I.チャイコフスキー/弦楽セレナーデより ほか	2009	6/7	第31回定期演奏会 cond.小田野宏之 R.ゼイガー/シンフォニア・ピリシマ O.リード/交響曲「メキシコの祭」 L.v.ベーターヴェン/交響曲第5番ハ短調
2000	6/3	第22回定期演奏会 cond.小田野宏之 J.ヴァン=デル=ロースト/オリゾンピカ J.S.バッハ(A.リード編曲)/羊は静かに草を食み J.S.バッハ(A.リード編曲)/アリオソ J.C.バーンズ/バガニーニの主題による幻想変奏曲 A.ドヴォルザーク/交響曲第8番ト長調	2010	6/6	第32回定期演奏会 cond.小田野宏之 A.リード/アルメニアダンス Part I P.スパーク/シンフォニエッタ 第2番 J.シベリウス/交響曲第2番ニ長調
	11/4	プロムナードコンサート'00 cond.長谷川正英 R.エルナンデス/エル・クンバンチェロ ほか		11/23	プロムナードコンサート'10 cond.中村純、長谷川正英 G.ミラー/イン ザ ムード、ムーンライトセレナーデ ほか
2001	7/7	中高生のための吹奏楽セミナー No.3 第23回定期演奏会 cond.小田野宏之 N.リムスキー=コルサコフ/スペイン綺想曲 R.ヴォーン=ウィリアムズ/イギリス民謡組曲(4楽章版) P.I.チャイコフスキー/交響曲第4番ハ短調	2011	7/3	第33回定期演奏会 cond.小田野宏之 L.バーンスタイン/「キャンディード」序曲 V.バーシケッチェ/交響曲第6番(吹奏楽のための交響曲) R.ワーグナー/「トリスタンとイゾルデ」より前奏曲と愛の死 C.ドビュッシー/「海」管弦楽のための3つの交響的素描
	12/15	プロムナードコンサート'01 cond.杉本毅、長谷川正英 M.ムソルグスキー/展覧会の絵(全曲版) ほか	2012	7/16	第34回定期演奏会 cond.小田野宏之 A.リード/春の猟犬 W. H.ヒル/セント・アンソニー・ヴァリエーションズ(原典版) S.ラフマニノフ/交響曲第2番ハ短調
2002	6/15	第24回定期演奏会 cond.小田野宏之 W.T.ウォルトン/クラウン・インペリアル、 「ファサード」よりボルカ、ヨーデリング・ソング、ポピュラー・ソング A.シェーンベルク/主題と変奏 N.リムスキー=コルサコフ/交響組曲シェヘラザード	2013	7/7	第35回記念定期演奏会 cond.小田野宏之 O.レスピーギ/ 交響詩「ローマの祭り」「ローマの噴水」「ローマの松」
	11/17	プロムナードコンサート'02 cond.長谷川正英 G.ビゼー/歌劇「カルメン」より前奏曲、ハネテ、闘牛士の歌 ほか	2014	7/6	第36回定期演奏会 cond.小田野宏之 J.C.バーンズ/交響的序曲 P.I.チャイコフスキー/バレエ音楽「白鳥の湖」ハイライト
2003	7/21	第25回定期演奏会 cond.小田野宏之 G.ヴェルディ/歌劇「アイダ」より凱旋行進曲 G.ビゼー/歌劇「カルメン」〜ハイライト	2015	6/7	第37回定期演奏会 cond.小田野宏之 小泉知子/フェスティバル・マーチ 兼田敏/吹奏楽のためのパッサカリヤ P.グレイアム/ハリソンの夢 A.P.ボロディン/交響曲第2番ハ短調 歌劇「イーゴリ公」より「だったん人の踊り」